医療最前線 ▶66

アスリートの支えに

北陸中央病院② リハビリ技術科長　橋場 貴史さん（43）

理学療法の技術は病気やけがをした人を助けるだけでなく、けがをしない体づくりにも役立てることができる。特にアスリートにとっては、けがを防ぎ、成績向上へ助言してくれるトレーナーの存在は不可欠だ。

「スポーツが好き」

橋場さんは、長く石川県を拠点として病院勤務の傍らトレーナーとして活躍。プロテニスやトランポリン、高校野球などの選手を支えてきた。2014年、北陸中央病院に移ったことを機に「富山のアスリートたちの力にもなりたい」と意気込んでおり、高校球児らの来院が増えている。

「とにかくスポーツが好き」という橋場さんは、空き時間にはプロ・アマを問わず試合を見に行き、選手の体の使い方や体の状態を観察する。「いい選手の動きは美しい。この感性が鈍ってしまうと、仕事に支障が出る」。美しい動きを頭の中で常に再現できる状態を保っておくことが、最良の治療や助言につながる。

橋場さんのいう美しい動きとは、体に余計な負担が掛からない滑らかな動きだ。無駄な負荷があると動きに不自然さが生じ、故障の原因になる。

選手の治療に取り組む橋場さん＝小矢部市の北陸中央病院

無駄な負荷は体の違和感として現れ、放置すれば痛みになる。「違和感の時点ですでに障害なので、痛みになったときには相当悪化している」という。整形外科で医師の適切な診断を受け、早く対処すれば、運動を続けながら違和感をなくすことも可能だ。

しかし、選手のフォームは1カ所を修正しようとすると全てが崩れることもある。そのため、指導者にはフォーム変更を拒む例も多い。無駄な負荷の原因を見極めて関節の機能を向上させ、成績を落とさずに体の使い方を変えさせることができるかが、理学療法士の腕の見せどころだ。病院で全てを治療するのは困難なので、スポーツの現場に顔を出して指導者との連携を密にすることが重要になる。

全ては活躍のため

臨床での治療だけでなく、研究の成果を論文にまとめて国内外の学会で発表し、さまざまな指摘を受けることも重要な仕事だ。自身のイメージを整理し、他者に説明できるようにする作業と考えている。「まず自分が理解していないと相手に理解させることはできません。全ては受け持った選手たちの活躍のためです」。スポーツへの情熱は誰にも負けないと自負する。

はしば・たかし　2003年に金大大学院医学系研究科保健学理学療法領域を修了。2017年から現職。専門理学療法士（運動器）。日本体育協会公認アスレティックトレーナー